

二〇二四年九月六日

里山の課外授業や捕虫網
茅葺の屋根より洩るる虫の声
投葉の増えて秋愁募りけり
野地蔵や藪のなかより虫の声
虫の闇天秤跳ぬる闇魔堂
部屋の名は松杉檜避暑の宿
夜店の灯尽きて神苑闇深し

二〇二四年九月五日

夕べとは違ふ虫の音朝湯殿
憎くけれどバツタを潰すこと出来ず
ぱらぱらとひかりの礫小鳥来る
秋の蚊に邪魔されてをり立話

二〇二四年九月四日

撫で仏膝にあめ玉秋うらら
棟上げの二拍一礼秋気澄む
やはらかき女将の訛り秋団扇

二〇二四年九月三日

岩角を咬んで動かぬ糸とんぼ
角部屋に旅装を解けば虫しぐれ
せせらぎと虫時雨和す加茂堤
落とし水までの日数の畦めぐる

うつぎ

康子

たか子

ほんこ

なつき

むべ

澄子

むべ

明日香

澄子

うつぎ

なつき

幸子

むべ

よし女

むべ

もとこ

千鶴

朝露に濡れて分け入る草葎

獅子唐のにぎやかに爆ぜフライパン

秋麗やヒジャブの赤を纏ふひと

秋簾風になぶられるたりけり

二〇二四年九月二日

葛の花山路狭めて右手左手

表札の古りて読めざる露の荘

風鈴に拾つて貰へぬほどの風

台風過白寿の腰をのぼしけり

独り居の黙して長き夜なりけり

鉄柵にかんじがらみや灸花

二〇二四年九月一日

寄せ書きに言の葉あふれ敬老日

根こそぎに引くは至難よ灸花

二〇二四年八月三十一日

石ひとつ動かし田水落としけり

配られし団扇が忙し野外能

沖はるか稲妻奔り艇庫閉づ

踏んまへて嵐に耐ふる女郎蜘蛛

康子

あひる

幸子

せいじ

澄子

澄子

うつぎ

董雨

やよい

ほんこ

あひる

うつぎ

みきお

なつき

澄子

むべ

毎日句会みのる選・二〇二四年九月八日